

著者が語る  
社会調査テキスト

盛山和夫

独立行政法人日本学術振興会  
学術システム研究センター 副所長  
東京大学 名誉教授

盛山和夫著

『社会調査法入門』

有斐閣

初版 1刷 2004年9月

初版 12刷 2017年1月



社会調査法に関わる授業を担当することは、私の教員生活で最も重要な柱のひとつであった。どんな授業もある程度そうなのだが、とくに社会調査法の授業は、自分自身の社会学的研究そのものの体験をベースにしながら、社会学と

その方法との関係について反省的に捉え直すいい機会だった。

計量分析の実践と教育

実は、社会調査を実施しデータを分析するという体験は院生時代にはその機会がなくて、北海道大学に赴任して2年目が初めてであったが、そのときにはすでに北大の大型計算機センターにSPSSが導入されていて、データ分析は非常に効率的であった。その当時、社会学の計量分析では、社会階層研究の地位達成過程分析を中心にパス解析が注目されていた。しかし当時はいいテキストがなく、パス解析を理解するためには、その手法を論じた論文などをさまざまに読み込んで自分で読解していくしかなかった。そうしたときに、直井優さんに誘っていただいて『社会調査の基礎』（直井優編、サイエンス社、1983年）にパス解析の解説を書くことになった。これが、社会調査に関わるテキスト執筆の最初である。

1985年に東京大学に移ってからは、社会学への進学者向けに毎年4単位分の社会調査の入門授業を担当することとなった。この科目は、自分が学生るときは安田三郎先生が担当されていて、先生は一種の実習の形で授業を行われていた。そうした授業のしかたも有効だろうとは思ったりしたが、種々の事情から、結局、通常の講義形式で行うことにした。最初の頃は、テキストも使わなかったように思う。しかし、そのうちに放送大学の岩永雅也先生と大阪大学の近藤博之先生と一緒に放送大学の授業として「社会調査法」を開講することになり、ビデオ撮りと並行して執筆したのが共著『社会調査法』（放送大学教育振興会、1992年）である。このあと、『社会調査法入門』を刊行するまではこれをテキストにしていたように思う。

1995年のSSM調査研究がほぼ一段落してきた2000年頃から、日本社会学会を中心に社会調査士資格制度を構築するための準備作業が本格的に始まり、社会調査教育の標準的なカリキュラムはどうあるべきかなどについて、分野や専門の異なる研究者のあいだで活発に議論することが多くなった。なかでも大きな論点だったのは、いわゆる質的調査と量的調査との関係で、標準カリキュラムの設計がややもすると計量分析重視になりかねないことへの懸念がしばしば発せられた。歴史的にみれば、社会学的な実証研究においては事例研究に代表される質的調査の伝統は重要なものであった。ただ、当時は質的な社会調査の教育について、どういうものが標準的な内容であるかの共通理解が必ずしも存在していなかったため、具体的に標準カリキュラムに組み込む点では困難もあった。

そのように、社会調査教育について全般的な視点から考えることが多くなった頃、東大の社会学出身の有斐閣に入社して間もない若い編集者（つまり、私の社会調査の授業を受けている）から、社会調査法についての教科書執筆の話がもたらされた。長年にわたって社会調査の授業を担当してきた経験



から、それまでのテキストに欠けているものを補い、不適切なところを改めた新しいテキストが必要だという感覚は強かったから、一も二もなく引き受けることにした次第である。

### 工夫した二つの特色

本書で工夫したり、重視したポイントには次のようなものがある。

第一は、社会調査および社会学の方法の根本に関わっているが、「意味世界の探求のための方法としての社会調査」という位置づけを前面に押し出したことである。一般的には、社会調査とは「主観的ではない、客観的なもの」を測定することだと思っている人が多い。なかには、無作為抽出などの「科学的な調査方法」によってえられたデータこそが最終的な事実だという「経験的データの物神化」も見られる。たしかに、社会調査とは社会に関するできるだけ正確な事実を観測収集することである。しかし、そのことは、「最終的な探求の目標」がそこで終わることを意味しない。なぜなら、探求の目標は当然、「社会はどうなっているか」というものだが、その「社会」とはデータの背後にある「意味世界」に他ならないからである。

このことを痛感したのは、85年SSM調査において「中意識」問題にアタックしているときだった。そこでの問題は、「調査でえられた中意識の分布は1955年から1975年にかけて著しく増大し、そのあと1985年ではあまり変化が見られないが、それはなぜか」というものであった。いうまでもなく、「豊かさの度合いにしたがって中意識が増える」といった単純な理論が成立しないことは明白で、明らかに「人びとの意識の裏側、すなわち意味世界」について考察をめぐらさなければならなかったのである。すなわち、社会調査データが意味するものは第一義的には人びとの行動、属性、回答でえられた意識状態などではあるが、社会調査を用いた研究とは単にそれらの観測結果を報告するだけが目的ではなく、それを通じて社会について何が分かるかを考察することだ、ということに思い至ったのであった。

第二の工夫は、質的調査をどう位置づけるかであった。私自身はほとんど質的調査に従事した経験がなかったが、社会学における質的調査の重要性は認識していた。むしろ、不満も多少あった。質的

調査を用いた研究を読んでいて気になったことの一つは、「当事者の語り」が「生の事実」としてしばしば特権化されることである。しかし社会学の研究としてはそうしたスタンスは適切ではない。ある意味で、社会学その他の古典的書物や論文を読んでその内容を理解し批判的に考察することは一種の「質的調査研究」とみなすことができるが、その場合には「著者の語り」を特権化することはない。質的調査でえられる当事者の発話、文書、行動などは探求のための重要な資料ではあるが、他方で「資料にすぎない」のもである。

本書では、二つの章で質的調査について解説している。分量からすれば少ないが、決して質的調査を軽視するつもりでそうなのではない。一つには、社会調査の一般的なカリキュラム構成自体がやはり量的調査に比重を置いていたためであるが、他方で、私自身の質的調査法についての体験と知識が不足していたためでもある。後者の点については、本書の足りないところを補うかのように、その後、すぐれた質的調査法のテキストが現れている。

実は、経験的データの物神化と生の事実という神話には、「リアリティの一部でしかないものを絶対視する」という共通の間違いがある。何かを絶対視してしまえば、探求はそこでストップしてしまう。本来的にはどんな探求にも終わりはない。社会調査を行って経験的なデータを収集し分析することで何を明らかにしたいかは人それぞれであるが、常に「まだ分かっていないこと」や曖昧なことは残るはずで、社会調査には探求への開かれた姿勢こそがふさわしいだろう。

本書が刊行されてすでに13年になる。この間、マルチ・レベル分析などをはじめとする新しい分析手法、Rのような新しい分析ソフト、そしてビッグデータのような新しいタイプのデータが出現するとともに、さまざまな質的データへの取り組みも著しく発展してきた。そうした面では本書はやや時代に遅れてきており、別のテキストで学習していただくしかない。とはいえ、本書としては、社会調査を基盤にした社会学的探求の方法の根幹を解説したつもりでもあって、そうしたテキストとして今後も若い人びとの知的好奇心を喚起することに役立つであろう。